

認識と価値形成

——企業と人間の進化の問題の基礎——

(一)

笠原俊彦

1. はじめに

企業との関わりにおける人間の進化の問題¹⁾を考察しようとするとき、わたくしは、この考察を、人間が形成する価値の考察から始めようと思う。そもそも、価値は、人間によってだけでなく、他の有機体種によっても形成されている、と考えられうるのであり、人間が形成する価値は、さまざまな有機体種が形成している価値の1つとして考察されうるのであるが、このことについては、わたくしは、上記の問題の考察にとって必要な限りでのみ、言及することとしたい。

しかも、わたくしは、人間が形成する価値をとりあげるとき、この価値のなかでも、わたくしがとくに内在的価値と呼ぶものをまずとりあげ、この価値の考察によって、企業との関わりにおける人間の進化の問題の考察を始めることとしたい。

以上の理由として、わたくしは、つぎの5つを述べることができるであろう。そのうち最初の2つは、内在的価値というよりも、むしろ、わたくしが外在的価値と呼ぶものを考察することの理由であり、続く3つが、外在的価値に先立って、内在的価値をまず考察することの理由である。

1) この問題については、つぎを参照のこと。

拙稿「企業と進化の問題」『松山大学論集』第10巻第3号，平成10年8月。

企業と人間の進化の問題の考察において、わたくしが、人間が形成する価値を考察しようとする理由の第1は、企業が人間によって形成される価値の1つとしての外在的価値であり、しかも、その1つの特殊形態であることにある。

人間が形成する価値は、もともと、人間がその心のうちに形成し抱懐するものであり、この意味で心理的存在ないし内面的存在である。このように心のうちに形成され抱懐される価値を、わたくしは、内在的価値と呼ぶことができるであろう。

だが、人間が形成する価値は、このように人間の心のうちにのみ留められるわけではない。それは、ときに、人間によってその外部に表出され、何らかの形態を与えられた存在となることがある。それは、これを形成し抱懐する人間によって、この人間とは別個の何らかの外部の存在として形成されうるのである。このような価値は、外在化された価値であり、これを、わたくしは、外在的価値と呼ぶことにする。これは、おそらく、K. Popper のいう世界3と同じものである²⁾

外在化された価値ないし外在的価値は、じつに多様な形態をとる。そのうちには、複数の人間によって形成されまたは利用されるもの、この意味において社会性をもつものがある。そして、このように外在化され社会性をもつ価値のなかに、行動基準ないし規範としての性格をもつものが現れる。これは、複数の人間に対し、その行動を規制し、特定の行動様式をとらせる価値である。このような価値を、わたくしは、制度としての価値、または単純に制度と呼ぶことにしよう。これは、煎じ詰めれば、しばしば社会制度と呼ばれているものと同様である。

企業は、まさに、この制度としての価値の1つであり、今日では、その代表的形態である。そこで、企業を理解しようとするとき、われわれは、価値、と

2) Popper の世界3については、邦文の著書、論文はほとんどない。これについては、わたくしの若干の論述を参照されたい。

前掲拙稿、68～71ページ。

りわけ制度としての価値、の理解を必要とする。

第2の理由は、人間が形成する価値が、人間の進化の産物であるとともに、人間の進化にとって決定的な影響要因ないし淘汰圧をなす、と思われることである。この後者の意味で、人間が形成する価値は、人間の進化の主要因の1つであると思われる³⁾

人間が形成する価値は、有機体が形成する価値の1つであり、有機体の進化における産物の1つとしてみられうるものである。それは、まず、有機体の内部に存在するものとして生成し発展し、さらに、これに加えて、有機体の外部に実在化されて発展することになったと思われる。

有機体の内部に存在するものと、その外部に存在するものとの、この2種の価値は、わたくしが、上に、とくに人間についてはあるが、それぞれ、内在的価値および外在的価値と呼んだものに他ならない。これらの価値は、人間についてのみ存在するものでなく、他の有機体種についても（外在的価値は、いくつかの有機体種にも）存在しうるものであることが注意されなければならない。そこで、わたくしは、内在的価値、外在的価値という言葉を用いることにしよう。

有機体の進化の産物としての内在的価値と外在的価値は、いずれも、有機体の進化に影響しうる。それらは、とりわけ、有機体の進化の方向を規定しうる⁴⁾。有機体は、まず、内在的価値を形成し、自らが形成したこの価値によって、その進化の方向を規定される。つぎに、ある有機体種が内在的価値のみならず外在的価値をも形成することになるとき、この有機体種は、この2種の価値によって、その進化の方向を規定されることになる。

3) このことについては、つぎを参照のこと。

前掲拙稿。

拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号、平成4年12月。

拙稿「価値と価値形成機構—ポパーの内部的淘汰の理論に関連して—」『松山大学論集』第9巻第1号、平成9年4月。

4) このことについては、とりわけ、つぎを参照のこと。

拙稿「企業と進化の問題」

さまざまな有機体種のなかでも、人間は、とりわけ外在的価値を著しく発展させ、このことによって、その進化において外在的価値の影響をとくに強く受けることになっていると思われる。人間については、このような外在的価値として、今日、とりわけ企業が、その進化に大きな影響を与える要因ないし淘汰圧である。企業は、いまや、人間の進化における決定的淘汰圧である、とさえいえることができるであろう。そこで、人間の進化を考察しようとするとき、われわれは、内在的価値の影響のみならず、外在的価値、とりわけその1つとしての企業、の影響をも考察しなければならないのである。

以上2つの理由は、企業との関わりにおける人間の進化の問題の考察にとって、価値の理解、とりわけ外在的価値の理解が必要だ、とわたくしが考える理由である。だが、それらは、いまだ、当の問題の考察を、とりわけ内在的価値の考察から始めなければならない、とわたくしが考える理由を示すものではない。この後者の理由としては、わたくしは、つぎの3つをあげることができるであろう。

その第1は、内在的価値と外在的価値のうち、内在的価値こそ、有機体の進化の過程においてまず最初に生成し、すべての有機体の進化、したがってその1つとしての人間の進化、を規定してきたし、また依然として規定している、と思われることである。そこで、人間の進化との関連において価値を考えると、価値のうちで、まず内在的価値をとりあげることが、順序というものであろう。

第2の理由は、内在的価値が、外在的価値、そしてこの1つとしての制度としての価値、さらにはこの1つとしての企業、を発生させ発展させてきた基礎である、と思われることである。そこで、外在的価値の理解、とりわけ企業の理解は、その基礎としての内在的価値の理解なくしては、不可能だと思われる。このことは、価値の考察を、内在的価値の考察から始めることを、わたくしに要請するのである。

それだけではない。第3に、わたくしの理解では、外在的価値は、内在的価

値によって発生させられ、発展させられるばかりか、その人間の進化への影響は、内在的価値を介してなされる。わたくしには、外在的価値は、それ自体、直接に人間の進化を規定するのではなく、むしろ、内在的価値に影響を与え、このことによって、人間の進化に影響するのだ、と思われる。このことも、また、わたくしが、外在的価値と内在的価値のうち、内在的価値をまず考察しなければならない、と考える理由である。

このようにして、わたくしは、企業との関わりにおける人間の進化の問題の考察を、価値の考察から、とりわけ内在的価値の考察から、始めることにする。この場合、わたくしは、内在的価値が対象観念と狭義の価値とから構成されるというわたくしの考え⁵⁾から、この論文では、内在的価値のこの2つの要素の形成、すなわち対象観念の形成と狭義の価値の形成、を扱うこととしたい。ここに対象観念の形成とは、行為ないし機能としての認識であり、狭義の価値の形成とは、同じく行為ないし機能としての価値形成である。このことこそ、わたくしが、この論文の標題を「認識と価値形成」とした理由である。

2. 対象観念とその形成機構

2-1 広義の価値の要素としての対象観念と認識機構

価値という言葉は、一般に、広義と狭義との二義に用いられている。広義においては、それは、価値あるものごとを意味する。

この広義の価値は、2つの要素から構成される。1つは、ものごとであり、もう1つは、このものごとに結びつけられる価値である。この後者の価値は、例えば、ひとが、あるものごとに価値があるかないかを判断する、というときの価値、すなわち価値判断というときの価値である。このように、何らかのものごとに結びつけられる価値、これが狭義の価値である。

以上のように考えるとき、われわれは、広義の価値を、ものごとと狭義の価

5) このことについては、つぎを参照のこと。

拙稿「価値の構造(一)」『松山大学論集』第4巻第3号、平成4年8月。

値との2つの要素から構成される全体として理解することができる。それは、ものごとと狭義の価値との結合である。

このような広義の価値について、われわれは、予め、いくつかのことに注意しておかなければならない。

その1つは、広義の価値の構成要素の1つであるものごとが、われわれの認識や行為の対象としての事物ないし事実そのものではなく、このような対象についてわれわれが形成する心像、認識像、思惟像ないし観念像だということである。

わたくしが知る限り、このことは、一般に理解されていない。そして、わたくしには、このことの無理解が、社会科学の分野における諸研究に、さまざまな誤謬を生起させているように思われる。

この1つの例として、わたくしは、ここで、M. Weber の Idealtypus を理想型と訳さず、理念型と訳す、わが国の研究者に一般的な行き方⁶⁾を支えている思考をあげることができるであろう。

この思考は、事実と理念とを、または事実と観念とを区別するに際して、われわれの経験の対象とわれわれが経験によって把握するものとを区別することなく、ともに事実として理解する。それは、われわれが経験によって把握するもの、例えばわたくしが現在まさにこの文字を書くために使っている万年筆、について、わたくしが現実に触覚的、視覚的、さらには嗅覚的に把握しているものが、万年筆という対象そのものないし事実そのものではなく、この事実についてわたくしが心のうちに形成している像、心像、理念ないし観念であることを理解することができない。むしろ、それは、この理念ないし観念こそが事

6) このことについては、つぎを参照のこと。

拙稿「理想型」による認識と経営経済学の学派分類(一)、『松山大学論集』第2巻第5号、平成2年5月。

拙稿「理想型と事実認識—理想型」による認識と経営経済学の学派分類—(二)、『松山大学論集』第6巻第6号、平成7年2月。

拙稿「規範科学の一理想型—価値判断と客観性—」、『香川大学経済論叢』第59巻第2号、昭和61年9月。

実だとする思考であるときえいってもよいであろう。

そして、この思考において、このように理解、ないしより正確には誤解、された事実から区別される理念ないし観念とは、このように誤解された事実、すなわち上記の意味で経験的に把握された心像ないし理念、すなわち感覚的に把握された理念、から乖離した理念である。この意味での理念は、感覚的に把握された理念から掛け離れたあらゆる理念を含みうる。そして、上記の事実としばしば対比される理想は、これが上記の事実すなわち感覚的に把握された理念から掛け離れているその程度によって、まさに理念の主要例をなすものとして理解されることになる。

このような思考に支配されているひとは、理念 (Idee) と理想 (Ideal) とを区別することができない。かれは、Weber が理念のなかでも特殊なものを表すために、Idee ではなく、わざわざ、誤解されることの多い Ideal の語を用いた理由を理解することができないのである。

われわれが何らかのものごとに価値があるとき、われわれは、しばしば、このものごとを対象としての事実そのものだ、と思い込んでしまいがちである。しかし、われわれが価値があるとき、このものごとは、じつは、対象としての事実そのものではない。それは、われわれが対象としての事実について自らの心のうちに形成している像、心像、である。そして、われわれは、自らが形成しているこの心像ないし観念像に対して、価値を認める。われわれが価値を認める、何らかの対象についてのこの観念像を、わたくしは、対象観念と呼ぶ。

対象観念は、対象としての事実とわれわれとの交流において形成される。この交流は、われわれの側からいえば、経験である。この経験において、われわれは、対象観念を形成する。すなわち対象を認識する。そして、われわれのうちにあつて、これを可能にするものは、われわれの認識機構ないし対象観念形成機構である。

ここに対象観念形成機構は、われわれが自らのうちに有している認識装置の

すべてを意味する。それは、われわれが生得的に有する認識の身体的器官ないし身体的形態としての解剖学的構造と、この後天的変形、例えば訓練によるその微妙な変形、のみならず、われわれが生得的な解剖学的構造とともに、やはり生得的ないし遺伝的に有する機能様式としての認識の様式ないし型、さらに、以上3つに関連しつつわれわれが後天的に修得する機能様式としての認識の様式ないし型のすべてを含む。

2-2 対象観念と認識機構との特殊性

われわれの対象観念形成機構ないし認識機構は特殊な性質をもち、このことによって、特殊な対象観念を形成する。このことを、わたくしは、ここでは、わたくしのこれからの考察にとって重要だと思われる、3つの局面について示しておこう。種的特殊性、集団的特殊性、そして個体的ないし個人的特殊性の3つが、これである。

(1) 種的特殊性

われわれの認識機構は、第1に、われわれが属する種に特殊な性質をもち、このことによって、同一の対象について、他の有機体種とは異なる対象像ないし対象観念を形成する。

わたくしは、ここで、対象観念という言葉およびこの形成ないし認識という言葉、そして認識機構ないし対象観念形成機構という言葉、人間についてだけでなく、あらゆる有機体種について用いることにしよう。さらに、また、わたくしは、対象観念を、とくに人間にのみみられる高度に意識的で精緻な対象像のみならず、このような対象像から、おそらく最も原始的な生物にみられる無意識のほとんど単なる刺激ともいべき素朴な対象像に至るまでのものを含むものとして理解することにしよう。

このとき、わたくしは、さまざまな有機体種が、その種ごとに、さまざまな対象観念形成機構をもち、これによって、さまざまな対象観念を形成する、と

いうことができる。換言すれば、対象観念形成機構および対象観念には、種の特異性ないし種差がある。このことは、有機体が、種によって、例えば感覚器官の形態と機能を異にし、このことから、同一対象について異なる対象観念を形成しうることを考えれば、容易に理解されうるであろう⁷⁾

人間の対象観念および認識機構は、さまざまな有機体種にみられる多様な対象観念および認識機構の1つであるにすぎず、まさに人間に特殊な性質をもつ。

それは、ある意味では、たしかに、もっとも高度に発展したものである、ということができる。それは、人間が、上述した、高度に意識的な、しかも精緻な対象像と、これを形成する機構をもつからである。われわれは、ここで、人間が感覚機構とは関わりなく、対象観念を対象とする対象観念すなわちメタ対象観念を形成しうることを想起してもよいであろう。しかも、われわれは、人間が、また、同時に、無意識のほとんど単なる刺激ともいふべき素朴な対象観念をも形成しうることを指摘することもできる。

人間の認識機構は、高度に意識的で精緻な対象像から無意識で素朴な対象像にいたるまでの、じつに多様な対象観念を形成するのであり、このいわば機能の多様性を、その特質の1つとする。しかし、この場合、われわれは、例えば人間の視覚機構が、蜜蜂の視覚機構が把えうる特定波長の光を把握しえず、このことによって蜜蜂とは異なる世界像をしかもちえないことをも、忘れてはならない。人間の対象観念形成機構は、おそらく、他の有機体種が有する対象観念形成機構の機能のすべてを備えているわけではない。それは、その機能の多様性にもかかわらず、やはり、対象観念形成機能のある一部を備えているにすぎないのである。

人間の対象観念および認識機構は、以上から、特殊であることが明らかであろう。それは、有機体の進化の過程において出現しおそらくは消滅していく特

7) わたくしがこのことを強く意識するようになったのは、つぎの書物によってであった。
ヤーコプ・フォン・エクスキュル、ゲオルク・クリサート著、日高敏隆、野田保之訳『生物から見た世界』思索社、昭和48年6月。

定種の有機体としての人間にみられる1つの現象であり、しかも、このような人間の対象観念と認識機構自体も、また、進化の特殊な過程のなかにあることが、忘れられてはならない。それは、測りえないほどの多くの可能性のなかで、特定の形をとりつつ変化しうるのであり、それがどのような形をとるのかは、偶然性によっても大きく左右されるのである。

(2) 集団的特殊性

人間の認識機構および対象観念は、人間が形成する何らかの集団および集団内部の位置によって特殊である。われわれは、さまざまな集団に属し、そのなかで何らかの位置を占めているのであるが、その際、われわれの認識機構と対象観念は、われわれが属する集団およびこの集団においてわれわれが占める位置によって異なりうる。このことを、われわれは、認識機構および対象観念の集団的特殊性ないし集団差と呼んでおこう。ここにいう集団的特殊性ないし集団差が広義の概念であり、そのうちに狭義の集団差と集団内位置差とを含むことは、いうまでもない。

認識機構および対象観念の集団差をもたらす集団は、さまざまな広がりを持ち、また、さまざまな持続性をもつ。それは、人種、国家、宗教、社会階層、職種、職場、その他の要因によって形成される複数の人間のまとまりである。

このような集団そして認識機構と対象観念との集団差は、そのあり方および程度を別にすれば、人間以外のいくつかの有機体種にも見出されうるであろう。だが、人間ほど、諸種の集団を形成し、これとともに、その認識機構と対象観念との集団差を質・量ともに著しく展開させている有機体種は、おそらく、他に存在しないであろう。

人間は、とりわけ今日、多くの種類の集団を形成している。そして、人間の一人一人は、通常、複数の集団に属し、そのなかで何らかの位置を占めている。このことは、個々人の認識機構および対象観念に、ある特殊な効果をもたらす。それは、同一の個人が、同一の対象について、その時々、または同時にさえ、

かれが属する集団およびそこにおける位置によって、異なる認識機構を用いて、異なる、時には矛盾する対象観念を形成しうること、これである。この形成の仕組は、認識機構とその機能についての未解明の、おそらく複雑な問題を構成する⁸⁾

われわれは、特定の個人のうちにこのように異なる対象観念、とりわけ矛盾する対象観念、を形成させる機構として、ここで、2つを区別することができる。

その1つは、集団のうちにあって、人間の対象観念形成に作用する機構である。この機構は、特定の個人の内部に存在する機構ないし内部的機構としての対象観念形成機構とは異なり、特定の個人の外部に存在する機構ないし外部的機構である。それは、個人の認識機構ではなく、個人の認識への外部からの影響機構である。集団のうちには、このような外部的機構が存在する。集団のうちにあるこの外部的機構は、集団によって、また同一集団についてもそのうちにおける位置によって、個人に異なる対象観念を形成させるよう働く。このような外部的機構は、後述するように、個人の狭義の価値の形成についても問題となる。

個人の対象観念の形成に作用する外部的機構と、後述する狭義の価値の形成に作用する外部的機構とは、通常、一体として存在する。それは広義の価値の1つとしての外在的価値、とりわけ制度、である。外在的価値としての制度は、集団が異なるにつれて異なりうる。それは、各集団について独自に生成し発展する側面をもつのであり、このことによって、相互に矛盾しうる。そして、特定の個人が、それぞれ相互に矛盾する制度をもつ複数の集団に属するとき、こ

8) G. Myrdal が明らかにした偏見の実在判断ないし偏見の認識 (bias) 形成の仕組みは、このような問題の1つとして理解されうる。

このことについての Myrdal の見解については、つぎを参照のこと。

G. Myrdal, "Objectivity in Social Research", New York, 1969.

拙稿「社会科学における偏見の実在判断の形成と価値判断の処理—ミュルダールの所論を中心として—」『香川大学経済論叢』第57巻第4号、昭和60年3月。

これらの制度は、その個人の認識に作用し、かれに矛盾する対象観念を形成させるのである。

このような矛盾は、外在的価値の1つとしての特定の制度が一般化するにつれて少なくなる。特定の制度の一般化とは、特定の制度による他の諸制度のある意味での統合を意味するからである。

わたくしが、ここで、ある意味での統合というのは、わたくしが、統合について2種を区別して考えているからである。1つは、論理的意味での統合、もう1つは、いわば力による統合である。前者は、諸価値の間の論理的関連にもとづく合理的統合であり、後者は、そのような関係とは別個の、精神的または物理的な何らかの力によるある価値の他の価値の圧倒または支配である。

この2種の統合は、もちろん、しばしば、その強弱を異にしつつ、同時に作用する。そして、この2種の統合は、同種の異なる諸価値（例えば、教義を異にする諸宗教）の間についてのみでなく、異種の諸価値（例えば、宗教と科学）の間についても生じうる。

それらは、さらに、特定の外在的価値の内部についても生じうる。なぜなら、特定の外在的価値は、通常、複数のいわば要素的価値の複合であり、これら要素的価値は、相互に関連しつつも、それぞれに生成し発展し、ときには相互に矛盾しうるのであり、ここには統合が問題となりうるからである。

だが、外在的価値、そしてその1つとしての制度については、わたくしは、別の論文で述べることとし、ここでの論述は、以上に留めておくことにしよう。

特定の個人のうちに、かれが複数の集団に属することによって、異なる対象観念、とりわけ矛盾する対象観念を形成させる機構のもう1つは、いうまでもなく、内部的機構としての対象観念形成機構である。これは、各個人の内部にあって、外部的機構としての外在的価値を受容する機構であり、また、この価値の作用を受けつつ対象観念を形成する機構である。それは、しばしば、矛盾する外在的価値を受容し、矛盾する対象観念を形成する。

内部的機構としての対象観念形成機構は、他方で、異なる対象観念、矛盾す

る対象観念を統合する。それは、とりわけ、諸々の対象観念の間の論理的関係にもとづいて、個人のうちで、さまざまな対象観念の差異または矛盾を解消し、合理的に統合された対象観念を形成する。われわれは、これを、対象観念の内部的統合化、とりわけ内部的合理的統合化と呼び、これに対して、先に述べた、特定の外的価値による他の外的価値の統合化および特定の外的価値の内部における統合化を、その対象観念の側面について、対象観念の外部的統合化と呼ぶことができるであろう。

対象観念の内部的合理的統合化において重要な役割を演じるのは、われわれの内部的機構としての対象観念形成機構がもつ論理的思考の機能である。われわれの内部的機構としての対象観念形成機構は、この機能をもつことによって、さまざまな対象観念の間に論理的関係を見出し、これにもとづいて、さまざまな対象観念を整理し、そのいくつかを合理的に統合する。そして、われわれは、内部的機構としての対象観念形成機構がなす対象観念のこの内部的合理的統合化こそは、上述の外部的機構としての外的価値の対象観念の外部的統合化、しかもその合理的統合化、すなわち外部的合理的統合化の基礎であることに留意しなければならない。

もっとも、このような対象観念の内部的合理的統合化は、いずれにせよ、不完全であることが忘れられてはならない。対象観念は、通常、論理化されていない部分を含むのであるが、この部分は、曖昧で矛盾した部分を含むし、また、対象観念の論理化された部分といえども、歪んだ形で論理化された部分を含むのである。

この場合、われわれは、内部的機構としての対象観念形成機構が、単に、矛盾する外的価値を受容して、矛盾する対象観念を形成しうるだけでなく、自ら、いわば能動的に、矛盾する対象観念を作り出しうることを、付言しておかなければならない。内部的機構としての対象観念形成機構のこのような機能は、外部的機構としての外的価値に作用する。内部的機構と外部的機構は、相互作用の関係にあることが注意されなければならない。

対象観念の内部的合理的統合化の不完全性、とりわけ内部機構としての対象観念形成機構がもつ、能動的な、矛盾する対象観念形成作用は、多くの場合、狭義の価値との関連で問題となるのであり、したがって、このことについては、主として、狭義の価値の形成と対象観念の形成との関連を述べる別稿で扱うことにしよう。

(3) 個人的特殊性

われわれの対象観念形成機構は、第3に、個々人によって異なり、このことによって、個々人に特殊な対象観念を形成しうる。このことも、また、人間のみでなく、それ以外の他の有機体種についてもいえることであり、そのため、われわれは、対象観念形成機構および対象観念には、人間についていえば、個人的特殊性ないし個人差が、有機体種一般についていえば、個体的特殊性ないし個体差がある、といわなければならない。

対象観念形成機構および対象観念のこのような個人差あるいは個体差は、その種差あるいは集団差に比べて、一般性を求める研究者の眼には、さほど重要とはみえないかもしれない。しかし、対象観念形成機構および対象観念の個体差は、人間の、さらには有機体種一般の、進化を考えると、けっして軽視されてはならないことがらである。なぜなら、この個体差こそが、後述する価値形成機構および狭義の価値の個体差とともに、Popperのいう新しい選好ないし新しい広義の価値を生み出し、有機体種の進化を規定する内部的淘汰圧となりうるものだからである⁹⁾

9) この個体差こそは、新しい広義の価値ないしこの意味での選好として、Popperのいう sparehead の主要内容をなすであろう。Popperの sparehead については、つぎを参照のこと。

K. Popper, "Knowledge and the Body-Mind Problem", London and New York, 1994.

2-3 対象観念および認識機構の相対性

人間の対象観念形成機構ないし認識機構は、全体として、さまざまな有機体種のそのなかで、最も優れた対象観念を形成しうるわけではないし、ましてや、完全な対象観念を形成しうるわけではない。それは、また、完全性に向かって進化しているわけでもない。この意味で、わたくしは、人間の認識機構と対象観念とが相対的であるし、また、おそらく相対的であり続けるであろう、といわなければならない。

わたくしは、人間の認識機構が完全な対象観念を形成しうるわけでも、他の有機体種に比べて最も優れた対象観念を形成しうるわけでもないことを、人間の認識機構および対象観念の種的相対性と呼び、人間の認識機構が完全な対象観念の形成の方向に向かって進化しているわけではないことを、人間の認識機構および対象観念の定相的相対性と呼ぶことにしよう。

(1) 種的相対性

人間の対象観念と認識機構は、他の有機体種のそれに比べて、全体として最も優れているということはできないし、ましてや完全であるということは決してできない。

この場合、われわれは、ここにいう認識機構が、もちろん、有機体の内部機構であり、これを補助しあるいは拡張する外部の存在、例えば望遠鏡のような道具、さらには科学、を含むものではないことに留意しておかなければならない。望遠鏡や科学は、外在的価値の1つであり、さきに述べた集団のうちにある外部的機構と同様に、外部的認識機構を構成する。

有機体がそのうちにもつ認識機能は、さまざまな要素的認識機構の連携的機能または要素的認識機能の総合として理解されうる。ここに要素的認識機構とは、例えば、視覚機構、聴覚機構、触覚機構など、またはこれら全体としての感覚機構などを意味し、要素的認識機能とは、これら要素的認識機構のそれぞれの機能を意味する。

要素的認識機構の種類と数は、有機体種によって異なる。例えば、感覚機構についていえば、深海動物には視覚機構を有しないものがある。人間は、複数の感覚機構をもつが、それでも、他の有機体種がもつ感覚機構の何らかを欠いている可能性がある。

さらに、特定種類の要素的認識機構は、有機体種によって、形態を異にし、これに関連して、その機能の様式と程度とを異にする。このような機能の様式の相違については、例えば、人間と魚との視覚機構の機能の様式の相違を、また、機能の程度については、例えば、人間と犬との嗅覚機構の機能の程度差をあげておけばよいであろう。

さまざまな有機体種は、それぞれが有する要素的認識機構を連携して機能させ、対象観念を形成する。この場合の連携のさせ方も、また、種によって異なり、このようにして、それぞれの種が形成する対象観念は、同一対象についても異なりうるのである。

人間の認識機構が、以上のように、それぞれに独自性をもつさまざまな有機体種の認識機構の1つであるにすぎないことを知るとき、それが、他の有機体種のそれに比べて、唯一完全であるとも、全体として最も優れているともいえないことは、明らかであろう。人間は、すべての要素的認識機構を、その最良の様式と程度において備えているわけでもなく、また、おそらく、それらを最良の連携において機能させるわけでもないからである。すなわち、

- ①人間は、いくつかの種類 of 要素的認識機構をもつにすぎず、これらの要素的認識機構は、人間が有しない要素的認識機構に比べて優れているということができない。
- ②人間がもつ要素的認識機構の機能の様式と程度は、他の有機体がもつ同種の要素的認識機構のそれに比べて優れているということができない。
- ③人間の要素的認識機構の機能の連携は、他の有機体のそれより優れているということができない。

人間を含む諸種の有機体の認識機構は未知の分野である。われわれは、人間

のそれについてさえ、ほとんど知ることがなく、まして、他の有機体種のそれについては、無知であるとしきいいようがない。有機体種の認識機構の研究は、人間についてさえ、始まったばかりである。このような状況で、各有機体種の認識機構の優劣について述べ、人間のそれを最も優れたものと断言することは、不遜以外の何ものでもない。

だが、諸種の有機体の認識機構について無知であることを別にして、われわれは、そもそも、有機体種の認識機構の優劣を、どのような基準によって判定できるのであろうか。

諸種の有機体の認識機構の優劣は、何よりも、それぞれの有機体種の個別的認識機構についてではなく、それぞれの有機体種の認識機構の全体について問われなければならないであろう。それでは、諸種の有機体の認識機構の優劣を全体として判定する基準を、われわれは、何に求めることができるのであろうか。

あらゆる有機体種について、認識が認識そのもののためにではなく、生存のために、あるいは、より良い生存のために存在する、と考えるならば、諸種の有機体種の認識機構の優劣を全体として判定する基準は、1つには、認識機構が、それぞれの有機体種の生存、さらにはより良い生存、に役立つか、に求められうるであろう。

このような基準を設定して、諸種の有機体の認識機構の優劣を判定しようとするとき、われわれは、この基準を、仮に、より良い生存に役立つか否か、ではなく、単純に、生存に役立つか否か、と限定的に解釈する場合でさえ、1つの困難に直面する。それは、Popperが、かつて、適応について直面したと同様の困難である¹⁰⁾ すなわち、ある種のバクテリアは、人間より長い間生存してき

10) このことについては、つぎを参照のこと。

K. Popper, "Ausgangspunkte, Meine intellektuelle Entwicklung" 3. Auflage, 1984, S. 256.

拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号、平成4年12月、96～97ページ。

ており、また、おそらく、これからも、人間より長く生存するかも知れず、このバクテリアの認識機構は、その生存に十分に役立っているから、生存への役立ちという基準からすれば、人間のそれよりも優れている、というのがそれである。

このような結論は、認識機構の優劣についてわれわれが暗黙のうちに懐いているイメージと、おそらく、掛け離れているであろう。それは、われわれの心のうちに、知的混乱をもたらすのである。われわれが上記の基準として、さらに、より良い生存を考えると、われわれの知的混乱は静められるどころか、一層拡大する。われわれは、そもそもより良い生存とは一体どのような状態であるのか、という問の前に佇むことになるであろう。

われわれに、このような知的混乱を引き起こす原因は、何よりも、生存に、さらにはより良い生存に、役立つか否かという基準が、認識機構の優劣を判定する基準としては、あまりにも曖昧であることにある。例えば、生存に役立つか否かという基準を用いるとき、有機体種の認識機構は、この機構の機能のいかに関わりなく、その有機体種が生存している限り、良いということになってしまう。このような基準は、認識機構について、ほとんど何も明らかにしないのである。

このことは、生存、さらには、よりよい生存、という基準が、われわれの研究の基準として有効性をもたないことを意味する、と速断されてはならない。すでに別稿で述べたように、この基準は、わたくしの研究の価値前提である¹¹⁾ わたくしにとっては、「企業と人間の進化」の問題を研究することの意味は、それが、多様な生命ないし有機体の1つとしての人間が、いかにしたらよりよく生き続けることができるか、という問題の解決に少しでも貢献することにあつたのである。

わたくしは、このような価値前提が、唯一絶対のもの、この意味で客観的な

11) このことについては、つぎを参照のこと。

拙稿「企業と進化の問題」『松山大学論集』第10巻第3号、平成10年8月。

ものだ、と考えているわけではけっしてない¹²⁾それは、さまざまな価値のなかから、わたくしが、自らの責任において選び取り、研究の前提として設定したものであり、結局のところ、わたくしの価値判断を根拠とする主観的なものなのである。それは、研究の基準として何らかの欠陥を有していることが明らかになれば、修正され、場合によっては、別の価値前提によって替えられなければならない。

さて、ここでわたくしが答えておかなければならないことは、上記のようなわたくしの研究の価値前提が、異なる有機体の認識機構の優劣を全体として判定する基準となりえないことが、はたして、研究の価値前提としてのその欠陥を意味するのか、これである。

このことについて、わたくしは、まず、わたくしの研究における価値前提の内容が、研究に先立って具体的に与えられているわけではないこと、むしろ、そもそも、このように与えられうるものではないこと、を述べなければならない。

少なくとも経験科学についてみると、価値前提は、それがたとえ特定の狭い分野についての研究において設定されるとしても、研究の全体について設定されるものである限り、その内容が、研究に先立って、研究において問題となりうるすべての基準を、こと細かに1つの価値前提から演繹することを可能とする形で、与えられうるわけでは必ずしもない¹³⁾むしろ、価値前提の内容は、研究の当初においては漠然としているものであり、研究の過程において、そこに生じる具体的諸問題の考察を通じて、1つ1つ検討され、次第に明確化されざるをえないものなのである。

しかも、この場合、われわれは、研究の過程においてどのような具体的諸問

12) 価値が絶対性をもつという考えについてのわたくしの見解については、つぎを参照されたい。

拙稿「規範科学の一理想型」『香川大学経済論叢』第59巻第2号、昭和61年9月。

拙稿「客観的」価値の認識の客観性」『香川大学経済論叢』第59巻第3号、昭和61年12月。

13) 経験科学から区別される規範科学についても、このような価値の演繹は、困難あるいは不可能である。このことについては、本論文注12)におけるわたくしの2つの論文を参照のこと。

題が生じてくるかは、研究者にとって、予め明らかではないことに留意しなければならない。したがって、何らかの価値前提がどのような具体的内容をもつことになるかは、それを設定する時点では、かれ自身にも、明確ではないのである。

それにもかかわらず、われわれの研究は、何らかの価値前提にもとづかざるをえず、われわれは、研究者として良心的であろうとする限り、これを、できる限り明示せざるをえない。

わたくしがつぎに述べておかなければならないことは、価値前提の内容を具体的諸問題の考察を通じて検討しようとするとき、その内容が、あらゆる具体的諸問題について直ちに明らかになるわけではないことである。

このことの原因の1つは、抽象の水準の間の距離にある。研究の過程で生じる諸問題は、それが具体的であればあるほど、その抽象の水準と研究全体の価値前提の抽象の水準との間の距離が大きく、そのため、その2つのものの間の関連は、漠然としたものとならざるをえない。両者の抽象の水準の間のこの距離は、ときに、あまりにも大きく、そのため、特定の個別問題と価値前提との関連について、われわれは、ほとんど手掛かりをさえ把むことができないほどである。

この距離は、価値前提が、これとの間の抽象の水準の距離が小さい諸問題の考察によって、いく分か具体化されるにつれ、これを媒介として、少しずつ克服されるかもしれない。この場合には、抽象の水準の間の距離は、縮まるわけではないが、この距離の間に存在するいわば抽象の階梯の間に、たとえ部分的ではあれ、何らかの道筋がつけられうるであろう。

だが、いずれにせよ、われわれは、われわれの価値前提と、われわれがその時々扱う個別的問題との関係が不明だからといって、われわれの価値前提が、われわれの研究の基準として有効性をもたない、という結論を性急に出すべきではない。むしろ、われわれは、この点について、自らが無知であることを自覚し、このことに耐えなければならない。ここでは、何よりも知的な廉直と忍耐とが必要とされるのである。

さて、それでは、さまざまな有機体種の認識機構の優劣を全体として判定する基準として、われわれは、他に何を考えつくことができるであろうか。

このような基準は、各種有機体がもつさまざまな要素的認識機構のみならず、これらの連携の仕方をも含めて、その優劣を総合的に判定しうるものでなければならぬであろう。このような基準を形成するためには、われわれは、おそらく、これら諸項目について、それぞれの重要度ないし比重を問題とし、できれば、各項目のこの重要度ないし比重を点数化しなければならないかもしれない。しかし、この比重、ましてやその点数を、われわれは、いかにして決定することができるであろうか。わたくしは、これを決定するための明確な根拠を示すことができない。このような比重は、おそらく、各人の好みに基づいて恣意的に決定することができるだけである。

さまざまな有機体種の認識機構の優劣について、われわれが何ごとかをいうるとすれば、それは、著しく限定された項目について特定の個別的基準を仮定し、この基準からみた限りで、各有機体種の認識の程度について、その優劣をいうこと、これだけであろう。ここにいう基準とは、例えば、何らかの静止している物体を、どの程度の距離から視覚的に把握することができるか、または、例えば、何らかの動いている物体に、視覚的、聴覚的またはその他の方法で、どの程度の距離から気付くことができるか、さらには、また、例えば、何らかの有機体種は、他の有機体種に比べて、どれ程の多様性を認識機構またはその機能について有するか、等である。

このような基準についての例示のうち、最後のものは、あるいは、認識機構の全体としての優劣と関連がある、とみえるかもしれない。そして、ある有機体種が多様な個別的認識機構をもち、しかも、それぞれの個別的認識機構について、一応の、またはそのいくつかについては、優れた、機能の程度を示すとき、われわれは、この有機体種が全体として優れた認識機構を有している、といたくなるであろう。

だが、われわれは、すでに述べた理由から、このようにいうことができない。

われわれは、また、これもすでに述べたことから、この有機体種の認識機構が、その生存により役立っている、ということもできない。

(2) 定向的相対性

以上の考察は、人間の認識機構が全体として優れたものへと発展している、という判定を、われわれが下すことができないことをも、また、明らかにするであろう。人間の認識機構は、人間の生存への役立ちという基準からみても、全体としてより優れた方向に向かって発展しているか否かは、分からない。われわれの認識機構の進化は、あるいは、われわれが属する種を破滅させる方向へと向かっているのかもしれない。

特定の個別的基準を仮定し、この基準から人間の認識機構をみるとき、われわれは、いくつかの点で、むしろ、人間の認識機構の衰退を認めなければならないようにも思われる。例えば、われわれの視覚機構や嗅覚機構は、何らかのものを視覚的または嗅覚的に把握する能力において衰退してきているのかもしれない¹⁴⁾われわれは、また、もしかしたら、過去に有していたかも知れない個別的認識機構をすでに失い、いまや、それが存在したこと、あるいは一部に存在することをさえ、疑うほどになっているのかも知れない¹⁵⁾

14) この衰退のあり方は、さまざまな人間集団について一様ではない。例えば視覚機構については、モンゴルの人々が遠くのものを見分ける能力において優れていることは知られている。この能力は、おそらく、草原での遊牧というかれらの生活様式と関連があるであろう。だが、この能力も、近代文明の波がかれらに及ぶにつれて、衰退していくのかも知れない。

15) Joy Adamson は、ライオンが予知能力を有するのではないかと考えている。また、すでに多くの民族において消滅したシャーマンは、このような能力を人間が有していたことの名残りであるかも知れない。

このようにいうと、ひとは、わたくしの研究者としての能力に疑いを懐くかもしれない。人々のこのような疑念こそ、Jungがこれに対抗したものである。わたくしは、上記のような予知能力については、存在したかも知れないし、存在するかも知れない、ということができるだけである。

以上については、それぞれ、つぎを参照のこと。

ジョイ・アダムソン著『野性のエルザ』文芸春秋、1985年。

ジョイ・アダムソン著『エルザわが愛』文芸春秋、1980年。

C.G. ユング著、ヤッフエ編、河合、藤縄、出井訳『ユング自伝—思い出・夢・思想—』1, 2, みすず書房、1972, 1973年。

もちろん、人間の認識機構のなかには、発展している、といえるものもあるであろう。このようなものとして、われわれは、人間の認識機構がもつ抽象能力をあげることができる。人間の抽象能力は、今日、とりわけ、科学的能力の形をとるに至っている。

ここにいう科学的能力は、もちろん、科学とは異なる。科学は、すでに述べたように、人間にとって外在的なものであり、これに対して、われわれがここでとりあげている科学的能力は、人間にとって内在的なものだからである。この科学的能力は、科学を形成し、把握する能力、そして、科学によって、人間の外界を、さらには、人間自体を把握する能力である。

ここで、われわれは、科学が、人間に、いわば迂回的認識を可能としていることを銘記するべきであろう。人間は、例えば、外界を、科学を介することによって、より良く認識することができる。この意味では、科学は、人間の認識機構にとっては、迂回的認識機構である、ということが出来る。科学的能力は、このような科学を形成し、把握し、これを用いて人間の内・外を認識する能力であり、人間がこのような能力をもつにいたったことは、人間の認識機構の一つの発展である、といわれなければならない。

しかし、われわれは、他方で、科学が、いくつかの点で、人間の認識機構を衰退させていることに注意しなければならない。このことは、科学と密接に関連する技術について、とりわけ技術の成果についてみると、容易に理解されるであろう。

われわれは、技術の成果としての器具、例えば眼鏡、を用いることによって、かえって、ある基準からみた視覚的能力、例えば裸眼で遠くを見る能力、を衰退させている。われわれは、また、技術の成果としてのテレビジョンやパーソナル・コンピュータの画面を見つめることによって、やはり、視覚的能力を減退させている。

われわれは、また、しばしば、外界を直接に把握するのではなく、科学的研究の成果としての知識によって、またはこのような知識としてのみ把握し、ま

た、技術的研究の成果としての機器を介して把握する。このようにして、われわれは、外界に対するいわば直接的認識能力を、次第に減退させる。われわれは、科学と技術とにますます依存し、われわれの生活は、科学と技術の世界の中で営まれることになり、かくして、われわれは、やがて、直接的認識能力の大部分を失うようになるかもしれない。このような能力の衰退は、やがて、人間の科学的能力、とりわけ科学を形成する能力、を減退させることになるであろう¹⁶⁾

わたくしは、以上において、対象観念および認識機構の相対性を、種としての人間を念頭に置いて述べてきた。だが、このような相対性は、種としての人間についてのみならず、人間の集団についても、さらには、個人についてさえ、考えられうるものである。

16) この能力が外界を直接に認識する能力に大きく依存していることは、例えば、つぎの書物から推測することができるであろう。

福井謙一著『学問の創造』佼成出版社、1984年。